「神の約束を待つ」
使徒言行録１章１－５節

「イエスは苦難を受けた後、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された」（3 節）と語られています。

復活されたイエスさまは、実に四十日間にわたって弟子たちに現れてくださり、ご自分が生きておられること、体をもって復活なさったことを弟子たちにも確かにわかる証拠をもって示してくださいました。また、それと同時にイエスさまは、神の国について弟子たちに話して聞かせてくださいました。

神の国は、本来、神さまによって私たち人間に恵み与えられていた国です。しかし、その神の国は、私たち人間の罪によって遠いものになってしまいました。私たちの心が神さまから離れてしまったその罪が、神さまとの関係を壊してしまったのです。でも、そのような悲惨の中にある私たちを神さまは憐れんでくださり、御子イエスをこの世へと送ってくださったのです。そしてイエスさまの十字架の死によって私たちの罪は贖われ、私たちは、再び神の国に生きることが赦されるものとなったのです。

この神の国、神のご支配が、イエス・キリストの十字架と復活によって始められている、イエスさまは、この神さまの救いのご計画を、私たち人間に対する神さまの愛を、最後まで示されたのです。そしてその御業を宣べ伝える務めを使徒たちにお委ねになられました。

しかし、イエスさまは、いきなり使徒たちを送り出したのではありませんでした。まず父の約束されたもの、つまり聖霊を待ちなさいと命じられたのです。そのためにエルサレムを離れずじっと留まりなさいと言われるのです。

では、エルサレムに留まるとはどういうことでしょう。それは、礼拝の場、祈りの場にじっと留まるということです。御言葉を宣べ伝え、イエス・キリストを証しすべく派遣されていく使徒たちが、その使命を果たすために、まず第一にしなければならないこと、それはじっと留まって、共に主を礼拝し、祈り、神さまを信頼して聖霊を待つことなのです。

ときに、私たちは、この待つということが出来ずに、自分中心な思いで動き出してしまいます。神さまがしてくださるのを待てないで、自分で何でもしてしまおうとするのです。しかし、そこには、聖霊の息吹に満たされた歩みは生まれてきません。初代教会の生き生きとした姿は、自分たちの力だけで何とかしようと頑張っている人々の姿ではありません。そうではなく、聖霊の働きを信じて、じっと待って祈り続けていく、そのところに神さまが与えてくださった成長と発展の姿なのです。

聖霊は私たちに、神さまが、イエス・キリストが、どれほど私たちを愛し、私たちのことを心にかけてくださっているのか、そのことを確信させてくれます。その確信に満たされる時、私たちは、聖霊が私たちのうちに働いてくださるのを落ち着いて待つことができるようになります。その意味で、私たちはすでに聖霊の働きの中にあるのです。教会は聖霊の宮です。その教会の交わりの中で、礼拝の中で、御言葉に耳を傾けつつ、聖霊が働かれるのを待ち望む、そのような信仰の道を共に歩んでまいりたいと願います。